

平成24年度病虫害発生予報第5号

平成24年7月5日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要

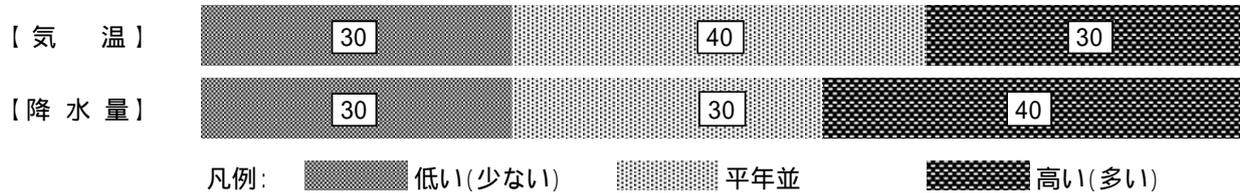
区分	農作物名	病虫害名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	葉いもち	平年並	平年並
		穂いもち	平年並	平年並
		紋枯病	平年並	平年並
		縞葉枯病	-	平年並
		(ヒメトビウンカ)	-	平年並
		セジロウンカ	やや遅い	やや少ない
		斑点米カメムシ類	平年並	平年並
フタオビコヤガ	平年並	やや少ない		
果樹	ナシ	黒斑病	-	平年並
		黒星病	-	平年並
		輪紋病	-	平年並～やや多い
		クワコナカイガラムシ	平年並～やや遅い	やや多い
		ハダニ類	平年並	やや多い
シンクイムシ類	平年並	平年並～やや多い		
果樹共通	カキ	炭疽病	平年並	やや多い
	カメムシ類	平年並	やや多い	
野菜	ネギ	さび病	平年並	平年並
		黒斑病	平年並	平年並
		白絹病	やや早い	平年並
		軟腐病	平年並	平年並
		ネギハモグリバエ	やや遅い	平年並
		ネギアザミウマ	平年並	平年並
	スイカ	つる枯病、炭疽病	平年並	平年並
		うどんこ病	平年並	やや少ない
		褐色腐敗病、疫病	平年並	平年並
		アブラムシ類	平年並	平年並
	イチゴ	うどんこ病	平年並	やや少ない
		炭疽病	平年並	平年並
		アブラムシ類	平年並	平年並
ナガイモ	ハダニ類	平年並	やや多い	
	炭疽病	平年並	平年並	

気象予報（抜粋）

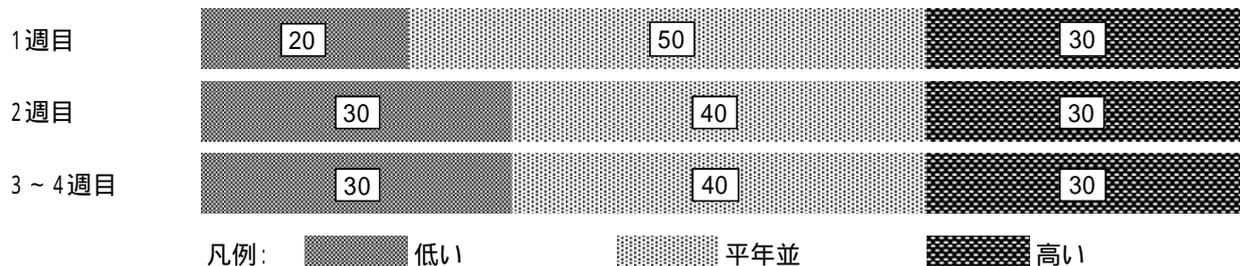
1か月予報（6月30日～7月29日：6月29日、広島地方气象台発表）

前半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。後半は、次第に高気圧に覆われ、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



普通作物

【イネ】

1 葉いもち

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬における置き苗発病調査では、発病ほ場率は1.3%（平年：1.6%）で、平年並であった。
- イ 7月1日現在、県予察ほ場（鳥取市橋本）における本病の発生は平年並である。
- ウ プラストム(いもち病発生予察システム)による感染好適日又は準感染好適日は、6月17日に広域で認められている。
- エ 長期効果持続型の育苗箱施用剤が広く普及している。
- オ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 上位葉に急性型病斑がみられるようであれば、病害虫防除指針等を参考にして、粉剤、水和剤、治療効果を有する本田粒剤などで防除を行う。なお、粒剤を使用する場合は、各薬剤の使用基準を確認して湛水散布を行う（湛水散布にあたっては、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項などを確認するとともに、止水期間を1週間程度とし、また、農薬の流出を防止するために必要な措置を講じるように努める）。
- イ 長期効果持続型の育苗箱施用剤を使用している場合でも、山間地、常発地などでは十分な効果が得られない場合があるため、ほ場の観察を徹底し、早期発見に努める。

- ウ 降雨が続く場合でも雨の止み間に防除を行い、適期を失しないようにする（粉剤散布後3時間程度降雨がなければ防除効果は十分にある）。
- エ 補植用置き苗を放置しているほ場では、置き苗を直ちに処分する。

2 穂いもち

(1) 予報の内容

発生地域	早期栽培地域及び早生品種栽培地域
発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、イネの生育ステージはほぼ平年並であり、出穂期もほぼ平年並と見込まれる。

イ 葉いもちの発生は平年並と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 予防防除を基本とし、粉剤又は水和剤を使用する場合は、穂ばらみ期及び穂揃い期に防除を行う。粒剤を使用する場合は、各薬剤の使用基準を確認して湛水散布を行う。

イ 葉いもちの発生に注意し、ほ場をよく観察して早期発見に努め、上位葉に急性型病斑がみられるようであれば、病害虫防除指針等を参考にして、粉剤、水和剤などで防除を行う。

3 紋枯病

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 去年の発生量はやや少ないため、越冬菌核量はやや少ないと見込まれる。

イ 7月1日現在、県予察ほ場（鳥取市橋本）における本病の発生は平年並である。

ウ 6月下旬現在、イネの生育はほぼ平年並である。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生の多いほ場では、幼穂形成期から出穂直前までに1～2回の防除を行う。コシヒカリでは出穂前15～20日の発病株率が25%、穂ばらみ期の発病株率が18%を防除の目安とする。

イ 昨年発生の多かったほ場では、特に注意する。

4 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 去年の本病の発生量はやや多かった。

イ 6月第5半旬現在、本病の媒介虫であるヒメトビウンカの予察灯への誘殺は確認されていない。

(3) 防除上注意すべき事項

本病の常発地において、育苗箱施用剤を使用していない場合は、病害虫防除指針等を参考にして、ヒメトビウンカ幼虫ふ化最盛期（7月第2半旬頃）に、粉剤、粒剤などで本虫の防除を行う。

5 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域（特に沿岸部）
発生時期 やや遅い
発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月第6半旬現在、予察灯への誘殺は確認されていない。

イ 向こう1か月の気象予報から、本田での発生時期は平年よりやや遅く、発生量はやや少ないと見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 今後、梅雨前線の活発化に伴い多飛来も予想されるので、ほ場における生息密度に注意し、今後の病害虫発生予察情報を参考にする。

イ 防除適期は、平年よりやや遅い8月上旬になるものと予想される。発生が多い場合は、病害虫防除指針等を参考にして、粉剤、粒剤などで防除を行う。なお、この時期の要防除水準は10頭（寄生成虫・幼虫数）/株である。

6 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域 早期栽培地域
発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、イネの生育ステージはほぼ平年並であり、出穂期もほぼ平年並と見込まれる。

イ 県東部の定点雑草地における本種の発生は平年並である。

ウ 6月第6半旬現在、アカスジカスミカメの予察灯への総誘殺数は平年並である。

エ これまでの気象経過および向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア イネの出穂20日前頃及び出穂期にイネ科雑草の草刈りを行って、カメムシ類の発生源を少なくする。草刈りは地域一斉に行うと効果が高い。ただし、イネの出穂期以降に、穂を付けたイネ科雑草の草刈りを行うと、穂で増殖したカメムシ類を水田に追い込むので、出穂期の草刈りはイネ科雑草が穂を付ける前に行う。

イ 周辺雑草地にカメムシ類の発生が多いほ場は、穂揃い期～乳熟初期に、病害虫防除指針等を参考にして、粉剤、水和剤などを散布する。

ウ 粒剤を使用する場合は、病害虫防除指針等を参考にして、各薬剤の散布適期に湛水散布を行う（湛水散布にあたっては、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項などを確認するとともに、止水期間を1週間程度とし、農薬の流出を防止するために必要な措置を講じるように努める）。また、散布後も発生が多い場合は粉剤、水和剤などで追加防除を行う。

エ 昨年、斑点米の発生が多かった地域では、本種の越冬密度が高い可能性があるため、発生状況には十分注意する。

7 フタオビコヤガ

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 6月中旬現在、巡回調査定点における発生ほ場率は平年並であったが、食害程度は全般的に低かった。
- イ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、第2～4世代幼虫の発生時期は平年並の7月第1半旬～8月上旬と見込まれる。
- ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生量は平年(H18～H23)よりやや少ないと見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 本種に対して効果が高い育苗箱施用剤(ルーチンアドスピノ箱粒剤、ツインターボフェルテラ箱粒剤、Dr.オリゼフェルテラ粒剤、スタウトダントツディアナ箱粒剤など)を使用していないほ場では、7月第4半旬頃より幼虫の食害が増加し始めると予想される。
- イ 7月中旬以降、穂ばらみ期防除の1週間前までに要防除水準(暫定版:下記の～の条件をすべて満たす場合、発生の主体が1.2cm以上の幼虫、被害株率90%以上、食害葉面積率10～20%以上)に達した場合は、病害虫防除指針を参考にして、直ちに粉剤、水和剤などで防除を行う。
上記の時期に要防除水準に達していない場合は、穂ばらみ期に、粉剤、水和剤などを散布する。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生量	平年並
-----	-----

(2) 予報の根拠

- ア 6月18～21日の新梢葉調査によると、県内の平均発病葉率は0.1%(平年:0.8%)で平年と比べてやや少なかった。また、果実の除袋調査によると、平均発病果率は0.8%(平年:0.9%)でほぼ平年並であった。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 梅雨期間中の降雨により新梢葉の発病が増加するので、梅雨明けまでは防除間隔を7～10日とし、新梢葉の発病の多い園ではこれに加えて追加防除を1～2回行う。
- イ 薬剤は、ベルコートフロアブル1,500倍液、アリエッティC水和剤800倍液、有機銅水和剤(キノンドーフロアブル及びドキリンフロアブル)の1,000倍液などを使用する。
- ウ 園内の風通しをよくするため、下草の管理を徹底する。
- エ 散布に当たっては、薬液が新梢の先端まで十分かかるように丁寧に散布する。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月18～21日の果そう葉調査によると、県内の平均発病葉率は1.1%（平年：3.0%）で平年と比べてやや少なかった。また、果実調査によると、平均発病果率は0.1%（平年：0.6%）で平年と比べてやや少なかった。

イ 7月上旬現在、現地ほ場（主に赤ナシ）では、葉や果実に発病している園が認められ、一部では発生が多かった。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病した葉や果実は伝染源となるため、できるだけ取り除き、園外に持ち出し処分する。

イ 赤ナシの有袋栽培では、袋掛け直前に薬剤散布を行う。

ウ 薬剤は、かけむらがないように丁寧に散布し、薬液のかかりにくい園の周辺部や枝葉混み合ったところなどは手散布等で補完散布を行う。

エ 薬剤は、ベルコートフロアブルの1,500倍液、有機銅水和剤（キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル）の1,000倍液などを使用する。

3 輪紋病

(1) 予報の内容

発生量 平年並～やや多い

(2) 予報の根拠

ア 伝染源は枝のいぼ病斑であり、ナシ園によっては発生の多いところがある。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並～やや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果実の発病は有袋栽培でほぼ防げるが、袋掛けが遅くなると発病が多くなるので早めに袋掛けを行う。また、無袋栽培では梅雨明けまでの薬剤防除を徹底する。

イ 薬剤は、キャプレート水和剤600倍液、アリエッティC水和剤800倍液、有機銅水和剤（キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル）の1,000倍液などを使用する。

4 クワコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並～やや遅い

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月3日現在、第1世代幼虫のふ化（ふ化初日、平年：7月5日）はみられていない。

イ 越冬世代幼虫のふ化最盛期は、平年より2日遅かった。

ウ 前年度は、本種による果実被害がやや多かった。

エ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並～やや遅い7月第2～3半旬と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤はスミチオン乳剤1,500倍液、モスピラン水溶剤（またはモスピラン顆粒水溶剤）4,000倍液、ダズバンDFの4,000倍液などを使用し、連用を避けて輪番散布する。

イ 薬剤の散布に当たっては、カイガラムシ類が集合する枝葉の他、枝の切り口、粗皮などにも十分にかかるようにする。

ウ 防除時期は、今後発表される情報を参考とする。

5 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、県予察ほ場（慣行防除体系）におけるハダニ類の10葉当たりの寄生個体数は、0頭（平年：0.02頭）とほぼ平年並の発生である。

イ 網掛け栽培を中心にハダニ類の密度が高いほ場がみられている。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、ハダニ類の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 例年、ハダニ類の密度は、梅雨明け以後の高温乾燥条件下で急激に高まるので、1葉当たりの成虫数1頭を目安に防除を行う。

イ ハダニ類は、種類によって薬剤効果が異なるので、種類を十分に見極める。また、薬剤の散布にあたっては、連用を避けて、輪番散布する。

ウ カンザワハダニ、ナミハダニにはコロマイト乳剤1,500倍液、カネマイトフロアブル1,500倍液、スターマイトフロアブル2,000倍液などを、クワオオハダニには前述の剤に加えて、バロックフロアブル2,500倍液などを使用する。

エ ナシ園の下草は、ハダニ類の発生源となるので草刈を励行する。

6 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並～やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、フェロモントラップにおけるシンクイムシ類の誘殺数は平年並～やや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、ナシヒメシンクイの第3回成虫の発生最盛期はほぼ平年並の7月下旬頃、モモシンクイガ第2回成虫の発生最盛期はほぼ平年並の8月中旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生盛期となる7月以降、シンクイムシ類は連続的に発生するため、定期的な薬剤散布により発生密度を低下させる。

イ 薬剤は、モスピラン水溶剤4,000倍液（またはモスピラン顆粒水溶剤）、ダズバンDFの4,000倍液、スミチオン乳剤1,500倍液、オリオン水和剤40の1,000倍液などを使用する。

ウ 裸果（受粉樹に残っている果実など）はシンクイムシ類の発生源となるので早急に除去する。

[カキ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 本病は枝幹部に形成された病斑で越冬し、恒常的に発生が認められる。

イ 前年における発病が多かったため、越冬伝染源もやや多いと考えられる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤は、7月上～中旬にマンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤又はペンコゼブ水和剤）600倍液などを使用する。

イ 発病が認められた新梢や幼果は除去して、園外に持ち出す。

[果樹共通]

1 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 5月以降、予察灯及び集合フェロモントラップにおけるカメムシ類の誘殺数は、やや多い状況で推移している。

イ ブドウでは、既にカメムシ類の飛来がみられているほ場がある。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、果樹園への飛来時期は平年並の7月中下旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 例年、第1世代成虫が発生する7月中下旬頃が果樹園への飛来量が増加する時期なので、定期的にはほ場を見回り、カメムシ類の飛来に注意する。ただし、多発生年の場合、7月上旬頃から果樹園への飛来量が増加した事例があるので注意する。

イ カメムシ類の飛来が認められた場合は、ナシ、カキ、リンゴ、およびモモを対象としてジノテフラン水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤）

2,000倍液、ナシ、カキ、およびモモを対象としてアグロスリン水和剤

2,000倍液、ナシ、およびリンゴを対象としてMR.ジョーカー水和剤

2,000倍液などを散布する。

ウ カメムシ類の防除にあたっては、今後発表される情報も参考とする。

野菜

[ネギ]

1 さび病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並であるが、一部で多発ほ場がみられる。

イ 本病は気温が24 以上では発生が少なくなる。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、オンリーワンフロアブル1,000倍液などを使用する。すでに多発している場合には、上記の薬剤にカリグリーンの800倍液を混用して散布するか、アミスター20フロアブル2,000倍液を散布する。

2 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。

イ 本病は気温が25 前後で、降雨が多い場合に多発する。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 根傷み、肥料不足となると発病しやすいので、ほ場の排水を図り、肥培管理に注意する。

イ 薬剤は、ダコニール1000の1,000倍液、ポリベリン水和剤1,500倍液などを予防散布する。発病後は、ロブラール水和剤1,000倍液などを使用する。

3 白絹病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地ほ場において本病の発生が散見されており、発生時期はやや早い。

イ 本病は高温多湿で発病しやすい。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 7月上旬の土寄せ時に、モンカット粒剤の10a当たり4~6kg、モンカットファイン粉剤20DLの10a当たり10~15kg、フロンサイド粉剤10a当たり15kgなどを株元散布する。

イ 7月中旬以降に発病がみられる場合は、モンカットフロアブル40の2,000倍液を株元に散布する。

4 軟腐病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における発生は認められていない。

イ 本病は高温多湿で発病しやすい。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ネギに傷が付くような無理な土寄せや追肥を行うと発病が助長されるので避け

- イ 植付後2ヶ月以上経過し、収穫まで1ヶ月以上を要するものには、7月上旬の土寄せ時に、オリゼメート粒剤10a当たり6kgを株元に散布する。
- ウ 最終土寄せ前後にナレート水和剤1,000倍液、Zボルドー500倍液又はヨネポン水和剤500倍液などを7～10日間隔で2～3回散布する。

5 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における本種の発生量はやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、アグロスリン乳剤2,000倍液、アクタラ顆粒水溶剤1,000～2,000倍液、オンコルマイクロカプセル1,000～2,000倍液などを散布する。

6 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における本種の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤は、ランネート45DF1,000～2,000倍液、モスピラン水溶剤(またはモスピラン顆粒水溶剤)2,000倍液、アドマイヤーフロアブル2,000～4,000倍液、アクタラ顆粒水溶剤1,000～2,000倍液、アグロスリン乳剤2,000倍液、オンコルマイクロカプセル1,000～2,000倍液などを用いて、7～10日間隔で散布する。

イ 同一薬剤、同系統の薬剤を連用すると効果が低下する恐れがあるので、上記薬剤をローテーション使用する。

[スイカ]

1 つる枯病、炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における、つる枯病及び炭疽病の発生量は平年並であるが、一部で多発ほ場がみられる。

イ つる枯病及び炭疽病は、降雨によって発病が増加する。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 雨滴のあたる箇所又は株元から発病するので、薬剤散布は株元及びつる先にも薬液がよくかかるように丁寧に行う。

イ 雨の日が続くと発病が増加するので、散布間隔を5～7日程度とし、雨のやみ間に防除する。

ウ 薬剤は、アントラコール顆粒水和剤400～600倍液、ダコニ-ル1000の700～1,000倍液などを予防散布する。発病後は、ポリベリン水和剤1,000倍液などを散布する。

2 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量はやや少ない。

イ 本病は、25前後の気温と乾燥条件で発病が増加する。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

発生初期からトリフミン水和剤3,000～5,000倍液、ポリベリン水和剤1,000～2,000倍液などを散布する。

3 褐色腐敗病、疫病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。

イ 褐色腐敗病及び疫病は多雨によって発生が増加し、一度発生すると、急速に広がる。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場の排水を良好にする。特に豪雨時には滞水のないように配慮する。

イ 毎年、疫病の発生する圃場では、ジマンダイセン水和剤400～600倍液を予防散布する。

ウ 多雨が続くとき、又は集中豪雨の後にはリドミルMZ水和剤1,000倍液を散布する。褐色腐敗病の発生圃場ではリドミルゴールドMZ1,000倍液、ホライズンドライフロアブル2,500倍液などを散布する。

4 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、県予察ほ場(東伯郡北栄町)に設置した黄色水盤における有翅アブラムシ類の飛来量は平年並である。

イ 現地調査ほ場におけるアブラムシ類の発生量はやや少ない。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、ダントツ水溶剤4,000倍液、アドマイヤー水和剤2,000倍液な

どを散布する。

5 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における本種の発生量はやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は引き続きやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、マイトコーネフロアブル1,000倍液、ダニサラバフロアブル1,000倍液などを散布する。新たに発生が増加する場合や発生がやや多い場合は、コロマイト乳剤1,000倍液を散布する。

[イチゴ]

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における育苗床での本病の発生量はやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本ほ場に病原菌を持ち込まないために、育苗期間中の防除を徹底する。

イ 防除にあたっては葉裏へも薬剤が付着するように丁寧に散布を行う。発病初期までの薬剤は、ベルコート水和剤1,000倍液、サンヨールの500~1,000倍液、アフエットフロアブル2,000倍液などを使用する。

ウ 多発している場合には、トリフミン水和剤3,000~5,000倍液、モレスタン水和剤3,000~4,000倍液などを散布する。

2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地ほ場の育苗床において、本病の発病が一部認められている。

イ 本病は高温多雨で発病しやすい。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗期間中、罹病性品種については、下記の薬剤を定期的に散布する。なお、薬剤散布にあたってはクラウン部分、葉柄、托葉、およびランナーにも薬液が付着するように丁寧に散布する。下葉かきによる傷口、ランナーの切り口などからも感染するので、下葉かきの直後にも薬剤散布を行う。育苗初期の防除を徹底し、発病株は除去する。

イ 育苗初期は、菌が残っている可能性もあるため、アミスター20フロアブル2,000倍液、ゲッター水和剤1,000倍液、バイコラル水和剤2,500倍液などを散布する。なお、アミスター20フロアブルは薬害が出やすいため、展着剤を加用しない。

ウ その後の散布薬剤は、ベルコート水和剤1,000倍液、デランフロアブル1,000倍液、アントラコール顆粒水和剤500倍液、ジマンダイセン水和剤600倍液などを用いて、7～10日間隔で予防散布する。

3 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、県予察ほ場（東伯郡北栄町）に設置した黄色水盤における有翅アブラムシ類の飛来量は平年並である。

イ 現地のイチゴ育苗床におけるアブラムシ類の発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、チェス顆粒水和剤5,000倍液、ベストガード水溶剤2,000倍液などを使用する。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地のイチゴ育苗床における発生量はやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は引き続きやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

発生初期からサンヨール500倍液、アーデント水和剤1,000倍液などを散布する。発生が多い場合はコロマイト水和剤2,000倍液などを散布する。

[ナガイモ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地ほ場における本病の発生は平年並である。

イ 本病は降雨によって発病が増加する。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 肥料切れしないように適度な追肥を行う。

イ 薬剤は、ベルコートフロアブル1,000倍液、ダコニ-ル1000の1,000倍液、ジマンダイセン水和剤400～600倍液などを使用し、予防散布する。